

鳥インフルエンザ発生時の自衛隊派遣を想定したベースキャンプ方式による初動対応の検討

中央家畜保健衛生所 ほりぐちひろき 堀口裕生 ほか

【はじめに】

家きん農場における高病原性及び低病原性鳥インフルエンザ（以下「AI」）の発生時には、「高病原性鳥インフルエンザ及び低病原性鳥インフルエンザに関する特定家畜伝染病防疫指針」等のほか、愛知県（以下「県」）では「愛知県鳥インフルエンザ対策実施要綱」（以下「要綱」）に基づいて防疫活動を実施する。要綱では、殺処分等の防疫作業を実施するため、AI 発生農場内もしくは周辺に、防疫作業者等の集合・受付・着替え・休息、防疫資機材の受入・保管・分配、情報管理等を実施するための現場詰所を立ち上げることにしている。現場詰所にはコンテナハウスや仮設トイレを設置する必要があり、コンテナハウス等の手配・設置が完了するまで、現場詰所を立ち上げることができない。現場詰所の立ち上げが完了しなければ、県の動員者や自衛隊といった防疫作業者等を発生農場に送り込むことが難しく、立上げに要する時間が課題の1つである。また、現場詰所はその役割のため、相応の面積（100人あたり400㎡が目安）が必要であり、近年では農場の大規模化が進んでおり、より多くの防疫作業者等を農場に送り込む必要があり、より広い場所を確保しなくてはならないことも課題の1つである。

一方、体育館等の既存の建物を防疫作業者等の集合・受付・着替え・休息、防疫資機材の受入・保管・分配等を実施するためのベースキャンプ（以下「BC」）として利用すれば、現場詰所の立ち上げを待たず、農場に防疫作業者等を送り込み、防疫作業を開始することができる。この場合、発生農場においては、情報管理等のため、仮設テント等による簡易的な現場詰所（以下「簡易詰所」）を立ち上げる。平成28年度の国内の家きん農場におけるAI発生時には、実際に他道県においても、BC方式による効果的な防疫作業が実施された。

県では、毎年、県内の地域ごとに農林水産事務所と家畜保健衛生所からなる地域防疫部会（以下「部会」）を立ち上げ、AI発生を想定し、市町とも調整を行いながら、防疫演習及び部会内の各班における班別研修を実施している（図1）。平成29年度の西三河地域の部会では、岡崎市



図1. 地域防疫部会における防疫演習

内の10万羽規模の採卵鶏農場をAI発生想定農場として防疫演習を実施した。その中で、総務広報班及び防疫計画推進班の班別研修として、自衛隊の派遣を想定したBC方式による初動対応について検討したので、その概要を報告する。検討項目は、1. BC及び簡易詰所の選定、2. BC方式に対応した作業スケジュール、3. 動員者用バスの運用計画、4. 動員者の管理法、5. 自衛隊への対応、の5項目である。

【1. BC 及び簡易詰所の選定】

BCは岡崎中央総合公園の体育館とし、自衛隊と県の双方で使用することとした。東岡崎駅から県の動員者の集合場所である西三河総合庁舎までは徒歩で移動し、西三河総合庁舎からBC間、BCから農場間はバスで移動する。所要時間は東岡崎駅から西三河総合庁舎間が徒歩で5分であり、乗降時間を含め、西三河総合庁舎からBC間が25分、BCから農場間は20分である。それぞれの位置関係を図2に示す。

簡易詰所については、発生想定農場周辺は工場、山林、水田に囲まれており、農場周辺に設置することが難しいため、農場内の空き地に設置することとした。簡易詰所には仮設テント(3.6m×5.4m)3張及び仮設トイレ等のほか、情報管理等を実施するためのコンピューターや通信機器を備えた防疫指揮車を配置する。また、今回の発生想定農場の簡易詰所では、農場内の作業班全体の休憩を実施するための十分な広さを確保することができないため、全体の休憩はBCに戻って行うこととし、簡易詰所は傷病者の応急手当やトイレ休憩を行う小規模なものとして設置することとした。また、自衛隊用の簡易詰所として、農場内の車庫も利用することとした。簡易詰所のレイアウトを図3に示す。



図2. ベースキャンプ及び農場の位置関係

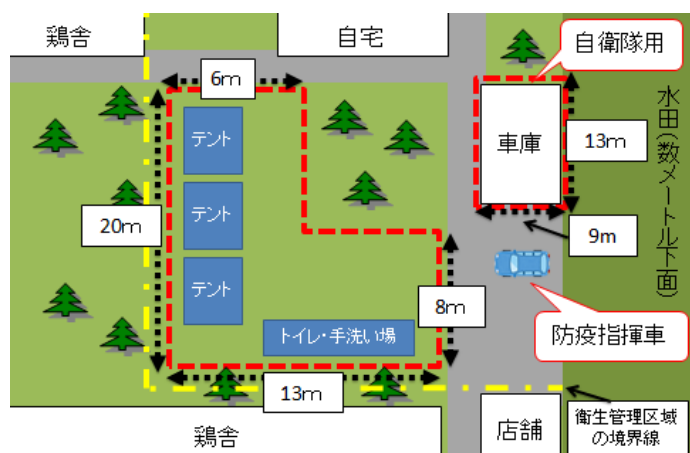


図3. 簡易詰所のレイアウト

【2. BC 方式に対応した作業スケジュール】

図4は24時間の時系列で作業スケジュールを示した模式図で、上側が今回の検討案、下側が要綱の標準スケジュールである。BC方式に対応したスケジュールを検討したところ、ど

らも3クール制ということは同様であるが、標準スケジュールでは24時間あたり実働17時間のところ、検討案では実働16時間とした。

検討案では、作業開始・交代・休憩の際の入退場時の混雑緩和のため、以下の3点について標準スケジュールに修正を加えた。(1). 県と自衛隊の作業開始を1時間ずらすこととした。(2). 標準スケジュールでは1時間とされている交代時間を、検討案では2時間とした。(3). 鶏舎からの退出時は、一斉に退出せず、作業班7班(今回の検討では、殺処分班が6班、殺処分班のサポート作業を行うサポート班が1班の計7班体制とした)を4グループに分け、グループごとに20分ずらして退出し、BCへ移動することとした。鶏舎からの退出例を図5に示す。

休憩時間に関しても、以下の2点

について修正を加えた。(1). 夜間作業となる第1クールは、標準スケジュールでは1時間の休憩を2回とることとしているが、BCへの移動に対応するため、2時間の休憩を1回とることとした。(2). 昼間作業となる第2、第3クールでは、標準スケジュールでは1時間の休憩をとることとしているが、検討案では全体の休憩時間は設けず、班ごとに適宜休憩をとることとした。

【3. 動員者用バスの運用計画】

7班ある作業班が1班1台のバスに乗車することとし、また、防疫上の理由から、集合場所とBC間、BCと農場間にそれぞれ別のバスを運用することとしたため、計14台のバスが必要となる。14台の大型バスの即時手配は困難であると考えられるため、中型バスの運用を想定した。

作業班の人員体制については、要綱では1班あたり動員者30名と指揮者1名が標準とされているが、中型バスの乗車定員は27名のため、今回の検討では、殺処分班は動員者26名と指揮者1名とした。また、要綱に記載はないが、鶏舎退出時の消毒の補助や資機材の

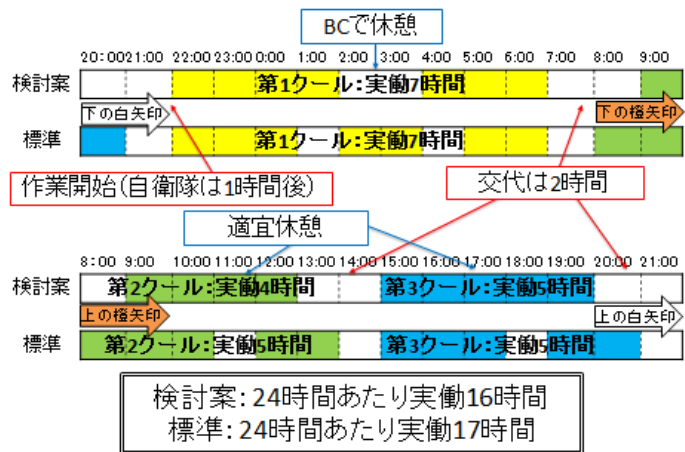


図4. 作業スケジュール

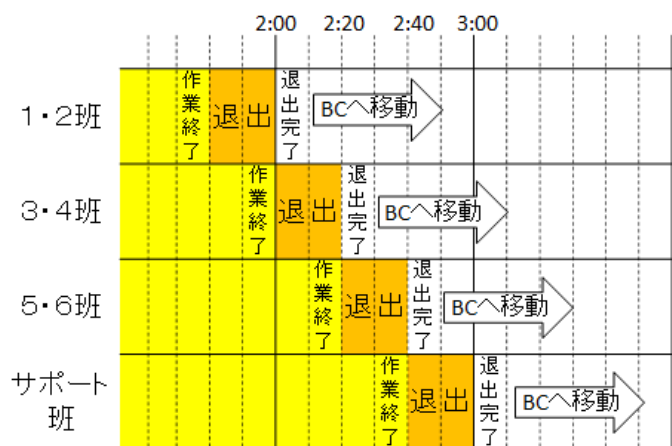


図5. 鶏舎からの退出例

受入等、農場内でサポート作業にあたる班も必要と考えられるため、動員者 24 名のサポート班 1 班を加えて、計 7 班 180 人体制とした。

【4. 動員者の管理法】

動員者の管理のためには動員者名簿の作成が必要だが、多数の動員者を円滑に管理するため、動員者名簿は【バスの号車番号】と【1~26 の通し番号】の背番号制で作成することとした。例えば、1 号車に 1 番目に乗車する動員者は「1-1」となり、2 番目に乗車する動員者は「1-2」、3 番目に乗車する動員者は「1-3」と、「1-26」まで続く。また、防疫服にも背番号を記載し（図 6）、動員者は番号で管理する。西三河総合庁舎に集合した動員者は、健康診断の終了後、1 号車から順にバスに乗車し、動員者 26 名と指揮者 1 名の乗車完了後に出発するが、動員者名簿の作成は、農場までのバス移動の間に指揮者が行うこととした。併せて、通常は現場詰所で実施する動員者に対する作業概要の説明についても、農場までのバス移動の間に、指揮者が実施することとした。農場到着後、指揮者は完成させた動員者名簿を農場に配置された総括グループ（農場における情報の取りまとめ等の担当グループ）に渡し、防疫指揮車からメール等で部会の本部等に送付する。



図 6. 防疫服への背番号の記載

【5. 自衛隊への対応】

県の自衛隊の対応窓口については、総括グループが対応する。BC 方式では、農場と BC にそれぞれ窓口が必要となるが、当該部会の総括グループは農場に配置されるため、他部会から総括グループ員を動員し、BC にも総括グループを配置することとした。

また、1 クールあたり 120 名の自衛隊の派遣を想定すると、農場周辺に作業部隊の車 15 台分の駐車場が必要となるが、今回の想定農場ではそれだけのスペースは確保できない。そのため、農場隣接の工場駐車場を利用することを想定した。

【今後の課題について】

このように、本県においても AI 発生時の防疫対応の際、BC 方式を採用することは有効であると考えられるが、検討をする中で課題も見えてきた。

今回の検討では、計 14 台のバスを運用することを想定したが、AI 発生後、即座に多台数のバスを手配することは、たとえ中型バスであっても困難が予想される。そのため、バ

ス協会との事前調整や、市町所有のバス利用等についても、事前に市町と話し合い、検討することが必要と考えられる。

また、従来の現場詰所方式でも同様の課題であり、BC方式でも解決が難しい課題として、動員に関するものがある。複数農場での AI 発生時等、簡易詰所を複数設置する必要がある場合には、簡易詰所に関わる担当者も複数必要となる。この場合、他部会からの動員が必要となるが、円滑に防疫活動を進めるためには、他部会でも簡易詰所に関わる担当として活動する人を動員することが有効と考えられる。そのためには、各部会の班員編成表を各部会間で共有し、事前に同一担当者の動員を調整できる体制の構築が必要と考えられる。